

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

第4号

平成25(2013)年度

文教大学

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年文部省令第 9 号）第 8 条による公表に加えて、平成 26（2014）年 3 月 16 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は学位規則第 4 条第 1 項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏名	論文題目	頁
甲第 5 号	博士 (心理学)	栗本美百合	臨床心理における造形活動の意義	1

氏名	栗本 美百合
学位の種類	博士 (心理学)
学位授与番号	甲 第 5 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 16 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当

学位論文題目	臨床心理における造形活動の意義
--------	-----------------

審査委員	主査	文教大学教授	高尾 浩幸
審査委員	副査	文教大学教授	今野 義孝
審査委員	副査	文教大学教授	森 裕子
審査委員	副査	文教大学教授	谷口 清
審査委員	副査	学習院大学教授	伊藤 研一

論文要旨

本論文では、造形活動が心理的援助に繋がる要因を明らかにすることによって、造形活動そのものが直接的な支援となる仕組みを検証する。この要因を解明するために、造形活動の中でも特に、「素材」、「創作過程」、「身体感覚」に焦点を当て、それらの要素がクライアントの心身に働きかける影響を明らかにする。

造形活動そのものが心理的な効果をもたらすことを、大森（1985）は「芸術が治す」という言葉で述べている。同様に海外での art therapy では“art as therapy”という言葉を用い、芸術活動そのものに自己治癒力があると考えられている。そこで、造形活動が直接的な心理的援助に繋がることを実証するには、造形活動のどの要素がクライアントの心身に働きかけるのかを捉える必要がある。造形活動の創作過程を俯瞰してみると、はじめに素材に直接触れることから始まり、五感や体の動きを通して、素材を変化させながら最終的な作品へと集約される。すなわち、造形活動に欠かせないものは、はじめに「素材」があり、次に「素材」が作品に変化するまでの過程である「創作過程」、そしてこの両者に関与する創作者の「身体感覚」となる。さらに、これらの3つの要素から創作過程の中で起

こってくる「美」的体験が自己治癒力の活性化に繋がると考えられる。これらの要素が、如何にクライアントの心身に関与し、影響を与えているかを考察することによって、造形活動自体が持つ心理的援助に繋がるメカニズムについて文献研究、調査研究および事例研究を通して考察を行った。

第Ⅰ部の文献研究では、日本の芸術療法と海外における *art therapy* の成立の過程を比較検討することによって、日本の造形療法の研究の発展にとって重要視されてきた観点、および軽視されてきた観点を明らかにした。さらに日本において等閑視されてきた観点の中から、特に造形活動の特徴である「素材」、「創作過程」、「身体感覚」に関する研究の現況をまとめた。「素材」は、単に物質としての表現媒体だけではなく、「ふれる」という体験を通して創作者の「心的素材」と媒介として結びつくと考えられる。「創作過程」は、「素材」から外的なイメージを作り出す過程において、内的なイメージの変化も同時に起こっていると推察される。このような「素材」や「創作過程」は、「身体感覚」を通して行われている。そのため、造形活動を提供するときは「身体感覚」も視野に入れておくことが、重要であると考えられる。

この論点を実証するために、第Ⅱ部では、「素材にふれる」ことに関する調査研究を行うことによって、「素材」が身体感覚を通してどのように「心的素材」に作用するのかを調査した。調査研究においては、木と粘土による「素材に『ふれる』」ことで生ずる言語連想調査」と「素材の質に関する質問紙調査」を行った。「素材に『ふれる』」ことで生ずる言語連想調査」の結果、創作過程の最初に素材に「ふれる」ことによって、身体感覚を通して素材の質感が内的な感覚や感情を刺激し、「心的素材」と結びつくことを実証し、その際に身体感覚の中で視覚よりも触覚が重要な要素となるという結果を得た。このため、創作過程の導入において触覚により意識を向けさせることによって、素材体験がより促進されるということが明らかとなった。さらに「素材の質に関する質問紙調査」では、粘土からは女性的で母性的なイメージ、木からは男性的なイメージが誘発されやすいことがわかり、この意味で両者は対照的な素材であることが考察できた。これらの調査研究を通して、素材にふれる体験だけでも触覚を通して創作者に様々な影響を与えることがわかった。創作の最初期段階の素材にふれるという体験だけでも、治療空間におけるアフォーダンス（*affordance*—クライアントに働きかける環境）として作用する可能性を有していると考えられる。

さらに、第Ⅲ部の事例研究では4つの事例を提示し、臨床における実際の造形活動がク

クライアントの直接支援に繋がることの検討を試みた。最初の事例では、面接室におけるセラピストの素材の選択や吟味が、「面接室」を「治療空間」にし、「セラピスト×クライアントの関係性」を「治療関係」に進展させる可能性について検討した。次の事例では、クライアントが自由に素材を選択できる環境が面接過程を促進させ、内的イメージの変化を反映していることについて考察した。3つ目の事例では、造形活動が自己治癒力を活性化させる要因として、創作過程における身体感覚を通じた「美」の体験に着目した。創作過程の中における「美」的体験は、作品を視覚的で客観的に捉えることで生じるのではなく、身体感覚を通じた体験であり、その体験が自己治癒力に結びつくことについて事例を通して検討した。最後に、セラピストが緊急支援において「素材」や「創作過程」、さらに「身体感覚」に焦点をあてて、造形活動のプログラムを提供した事例を挙げた。この事例の考察から言葉やイメージだけではなく、「身体感覚」まで視野に入れた造形活動を提供することが、直接的な心理的支援に繋がることを考察した。

第IV部では、本研究の全体像を図示し、考察をおこなった。

造形活動における「素材 (図-①)」については、セラピストが素材を体験し、その素材の特徴や優位性をよく知ったうえで、クライアントに適した素材を準備することは、クラ

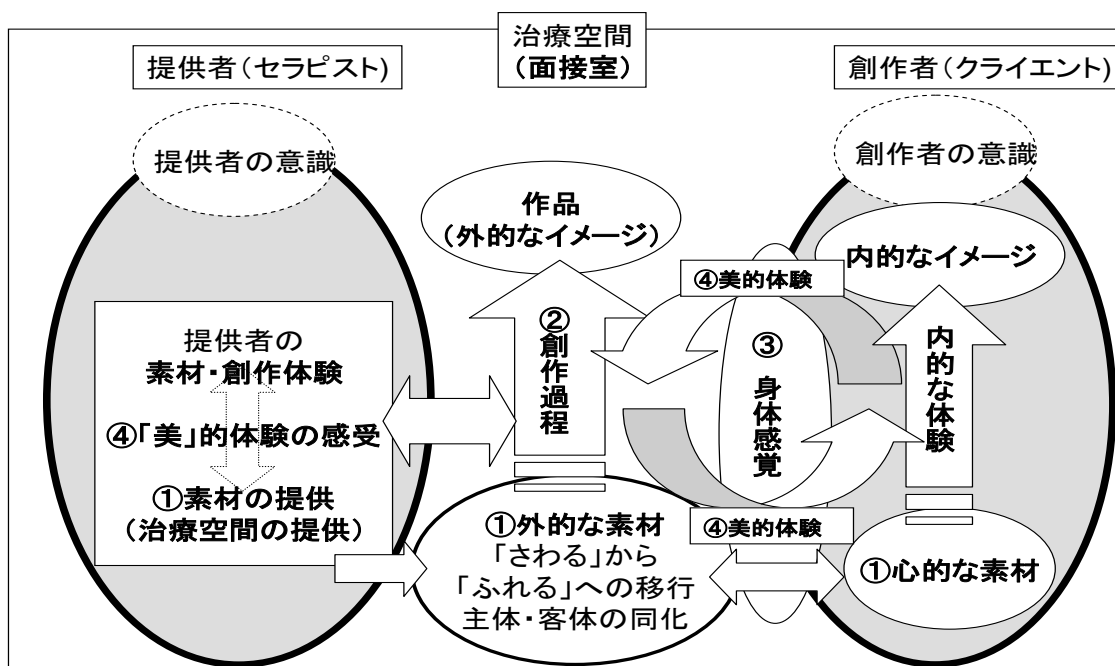


図 素材・創作過程・身体感覚の相関関係

イベントと素材の関係性の構築およびクライアントを取り巻く治療空間の形成を促進し、造形活動に影響を与えると考えられる。

「創作過程（図-②）」においては、素材に「ふれる」という体験が、「心的素材」に繋がることになり、素材との「ふれあい」を通して内的な交流が生まれる。創作とは、内的なイメージを外にある素材を通して、外に向けて表現するといった一方的な営みではなく、素材との交流を深めていく中で、外的なイメージが生まれてくると並行して、内的なイメージも形成されるという営みである。クライアントが外部の素材を変化させることは、素材と同質の「心的素材」に触れ、クライアントが「心的素材」と取り組むことと同義であり、素材を変化させながら外的なイメージを創り上げていく創作過程は、同時に内的なイメージが変化していくことに繋がると考えられる。

「身体感覚（図-③）」は、外的な素材を「心的素材」に結びつけ、創作過程においても、内外の体験の交流を可能にする重要な要素である。すなわち、造形活動においては、言語化されることよりも身体感覚の次元で素材や創作過程が心身に影響を与えている。この身体感覚の次元は通常言語化はされないが、言語やイメージの基盤になると考えられるため、心理的な支援を行う場合にセラピストは身体感覚を視野に入れておくことが必要になる。

『美』的体験（図-④）は、外的な素材と「心的素材」とが身体感覚を通して繋がり、創作過程の中でクライアントが内外のイメージの変化を自然に受け入れていく体験である。

「美」的体験の中で生まれたイメージは深い象徴性を持ち、一面的で即時的な解釈が困難となり、言語化が伴わない場合がある。通常、語られることのない創作過程における「美」的体験は、身体感覚を通してクライアントの自己治癒力を活性化させると考えられる。

すなわち、造形活動は心理療法の副次的な手段ではなく、創作過程そのものに自己治癒過程が内含されていると考えられる。この創作過程における自己治癒力が「芸術が治す」と“art as therapy”という概念の本質であると考えられる。

大森健一(1985). 芸術療法と病跡学. 大森健一・高江洲義英・徳田良仁(編). 芸術療法講座3 芸術療法の諸技法とその適応. 星和書店, pp. 173-192.

審査結果要旨

申請論文は、造形活動を題材とする芸術療法分野並びに臨床心理学分野に位置づけられる意欲的労作である。本論文は、心理臨床実践において求められる多面的かつ高度に専門的な援助として造形活動を取り入れることによって生じてくる有効な援助要因を解明し、造形活動そのものが直接的な支援となる仕組みを検証した。この要因を解明するために、造形活動の中でも特に「素材」、「創作過程」、「身体感覚」に焦点を当て、それらの要素がクライアントの心身に働きかける影響を基礎的調査研究と複数の事例研究を組み合わせることによって多角的に究明している。

従来の造形療法あるいは芸術療法においては、創作成果物としての「作品」に焦点を当てる研究と、クライアント・セラピスト関係を取り結ぶ「媒介としての創作」に関する研究に大別される。それに対して本研究は、クライアントが造形活動に取り組む過程（プロセス）そのものに注目し、造形活動がクライアントに及ぼす直接的な働きかけを解明することを目的としている点で、テーマに学術的な新規性が認められる。

論文の第Ⅰ部では文献研究として、日本の芸術療法と海外における **art therapy** の成立の過程を比較検討することによって、日本の造形療法の研究にとって重要視されてきた観点、および軽視されてきた観点を明らかにしている。先行研究を適切に吟味することによって、これまで日本の芸術療法において等閑視されてきた観点の中から、特に造形活動の特徴である「素材」、「創作過程」、「身体感覚」に注目する必然性を論述し、それらに関する研究の現況をまとめている。

造形活動の創作過程を俯瞰してみるならば、はじめに素材に直接触れることから始まり、五感や身体の動きを通して素材を変化させながら最終的な作品を創作していく。つまり、造形活動に欠かせないものとしては、はじめに「素材」があり、次に「素材」が作品に変化するまでの過程である「創作過程」、そしてこの両者に関与する創作者の「身体感覚」となる。さらに、これらの3つの要素を含む創作過程の中で生じてくる「美的体験 (aesthetic experience) が自己治癒力の活性化に繋がると考えられる。このように概括される造形活動過程を第Ⅱ部以降、調査研究と事例研究を通じて質的に異なるデータを組み合わせる多面的に検証していることは、複雑な体験過程を扱う本研究のテーマと整合する研究方法の採用と評価できる。

第Ⅱ部では、造形活動の「素材」についての基礎的調査研究を行っている。素材に関す

る印象はこれまで直感的に語られることが多く、素材から受ける印象を実際に調査した研究は少ない。そこでまず「素材にふれる」ことによって、「素材」が身体感覚を通してどのように「心的素材」に作用するのかを調査している。調査研究では、木と粘土による「素材に『ふれる』ことで生ずる言語連想調査」と「素材の質に関する質問紙調査」を行っている。「素材に『ふれる』ことで生ずる言語連想調査」の結果、創作過程の最初に素材に「ふれる」ことによって、身体感覚を通して素材の質感が内的な感覚や感情を刺激し、「心的素材」と結びつくことが明らかとなった。その際、身体感覚の中で視覚よりも触覚が重要な要素となるという結果が得られた。さらに「素材の質に関する質問紙調査」によって、粘土からは女性的で母性的なイメージが、木からは男性的なイメージが誘発されやすいことがわかり、この意味で両者は対照的な素材であると考察している。

続く第Ⅲ部では、4つの臨床事例を提示して事例研究を展開し、臨床実践における実際の造形活動がクライアントの直接支援に繋がることの検討を試みている。最初の事例では、面接室におけるセラピストの素材の選択や吟味が、「面接室」を「治療空間」に変え、「セラピストクライアントの関係性」を「治療関係」に進展させる可能性について検討した。次の事例では、クライアントが自由に素材を選択できる環境が面接過程を促進させ、内的イメージの変化を反映していることについて考察した。3番目の事例では、造形活動が自己治癒力を活性化させる要因として、創作過程における身体感覚を通じた「美」の体験に着目した。創作の最中における「美」的体験は、作品を視覚的に外から捉えることで生じるのではなく、身体感覚を通じた体験であり、その体験が自己治癒力に結びつくことを検討した。4番目として、セラピストが緊急支援において「素材」や「創作過程」、さらに「身体感覚」に焦点をあてて、造形活動のプログラムを提供した事例を挙げた。この事例の考察から言葉やイメージだけではなく、「身体感覚」まで視野に入れた造形活動を提供することが、直接的な心理的支援に繋がることを考察した。いずれの事例も申請者の優れた臨床実践活動に裏づけられた、適切で重厚な事例記述から始まり、「素材」、「創作過程」、「身体感覚」が相互に絡み合いながら展開していくさまが説得力を持って語られ、造形活動の仕組み（メカニズム）が無理なく導き出されている。クライアントの実際体験に足場をおく造形活動メカニズムの提示は、独創性を有し学問的な新知見をもたらしている。

ここまでの研究をまとめる形で、第Ⅳ部において総合考察を加えている。なかでも、造形活動における「素材」についてセラピスト自身が素材を体験し、その素材の特徴や優位性をよく知ったうえでクライアントに適した素材を準備することが治療空間の形成を促進

し、造形活動を実りあるものとさせるとの主張は、心理臨床家のトレーニングへの具体的提言となっている。また造形活動は心理療法の副次的な手段ではなく、創作過程そのものに自己治癒過程が内含されているとの知見によって、従来「芸術が治す」あるいは“art as therapy”と実践家が呼んできたところの経験知の本質を提示している点は、学界へ寄与するところ大である。

以上のように本論文は造形活動による心理的援助の意義を明らかにすることに成功している。一方で芸術療法、心理療法における他の理論との比較検討や治療論との相互参照については今後の課題として残されている。調査研究の素材が限定されていることなど、方法上の限界を指摘することはできるものの、真摯で粘り強い心理臨床実践に加えて多角的重層的研究作業を積み重ね、造形活動の実態とメカニズムを明らかにした成果は実践的に大きな意義を持つとともに基礎的、理論的にも高く評価できる。よって本審査委員会は博士（心理学）の学位授与が妥当であると全員一致で認めた。

博士学位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

第4号

平成26(2014)年6月

発行・編集 文教大学大学院

〒343-8511 埼玉県越谷市南荻島 3337

TEL 048-974-8811

FAX 048-974-8932